

野口彌太郎没後50年

野口彌太郎

―色の探究者―



後期展 2026.9.8^火》12.13^日



上:パリの踊子 下:カーニユの印象

旧長崎英国領事館2階
野口彌太郎記念美術館

【施設名】 旧長崎英国領事館／野口彌太郎記念美術館
【所在地】 長崎市大浦町1番37号 【連絡先】095-821-3205
【開館時間】午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
【休館日】 月曜日(祝日をのぞく)
【入館料】 一般700円, 小中高生350円 *旧長崎英国領事館と共通

野口彌太郎―色の探究者―

画家になろうと志した野口彌太郎は、23歳の時、登竜門のひとつであった二科展に 1922年(大正11)独学で初入選を果たしています。その恵まれた素質は天成の画家と称され、特に色彩について、同時代の洋画家、児島善三郎※1から「洒脱な色と筆意は確かに他に類例のない、ユニックなものだが、殊にあの暗い部分の深い美しい色は、あの伊太利文藝復興期のチチャン(ティツィアーノ...) 以後に発見出来ないものである※2」等と絶賛されました。

没後50周年を迎えた今年は、制作年代ごとに特徴的な作品を展示し、野口の生涯を通した作品の色彩の変化を感じていただける企画展を開催いたします。

前期展では1929年(昭和4)にパリにアトリエを構えた第一次滞欧時代から、帰国し戦後の長崎をはじめ日本の油絵を求めて各地を旅した時代。30年ぶりに渡欧し「自分の色」を発見したことで色彩画家としての第二の誕生となった第二次滞欧時代までを。後期展では鎌倉市に転居し永住の地と定めてからも、アジア、ヨーロッパ、モロッコへの取材など精力的に活動し、名品を生み出し続けた晩年をご紹介します。

ぜひ、野口が探し続けた「色」の変化をお楽しみください。

※1 児島善三郎 (1893-1962) 洋画家、独立美術協会を創立、代表作「アルプスへの道」など
※2 出典 児島善三郎「独立美術 第十五号 野口彌太郎特集」独立美術協会編 昭和9年



「アダムとエヴァ（パリ島にて）」油彩,1974

第42回独立展出品の代表作。人類の始祖アダムとエヴァの「楽園」を主題に、描かれた人物・場面に野口流の近代的な解釈の奥行きがある。



「南山手風景」墨,1971

野口は度々長崎を訪れた。東山手から南山手を描いた作品。中景に大浦天主堂と妙行寺が見える。空のエネルギッシュな曲線と屋根の鋭い直線が対比された風情のある墨絵である。



「映光」油彩,1974

晴れ渡った空。雲間からもれる太陽の光により海原はバアミリオンに照り輝いており、生き生きと吐息する光景は、日本人離れした独自のリズム感から生まれている。この絵は神奈川県民ホールの緞帳になっている。